



Title	Aspects of Language and Style in The Owl and the Nightingale
Author(s)	Kikuchi, Kiyooki
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27269
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	菊 池 清 明
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 2 5 7 4 9 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 25 年 2 月 27 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	Aspects of Language and Style in The Owl and the Nightingale （『梟とナイチンゲール』の言語と文体の諸相）
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 渡辺 秀樹 （副査） 教 授 渡部 眞一郎 准教授 尾崎 久男 摂南大学学長 今井 光規

論 文 内 容 の 要 旨

序では、ヒューマニズム運動が中世においては12世紀と14世紀に隆盛であったという、ダグラス・ブッシュの論説に注目しながら、『梟とナイチンゲール』の詩人が文学と言語に表明した新しい態度を探り、本作品が基底のところで神性から人間性への移行を限りなく示している点について主題を分析しながら考察している。とりわけ、問答詩で駆使される修辭法が単に論争の武器としての実用性だけでなく、徳を知り、そしてそれによって良き人間になるという修養の伝統でもあったという、これまで長く等閑視されてきた中世における修辭学の側面と本作品の世俗主義と個人主義を肯定する要素とが密接に関連していることを論じ、単なる問答詩には終わらない本作品の中世文学における重要な位置付けを指摘している。さらに、本作品には、それまでの文学の対象ではなかった、とりわけ日常生活の行動と話題、また日常卑近なものを主題とする世俗主義、そして人間の個性の内面性や性格をどこまでもリアリティに描くという行為が見られる。それまでの英文学には見られなかったそうした特質が、本作品の言語と文体にどのような影響を与え、どのような結果をもたらしたのかについて、具体的に検討し、本作品の言語と文体が英語英文学史上、どのような意義と重要性をもつのかについて考察することが本論文の主眼となることを述べている。

第一章では、鳥の問答詩の系譜における本作品の意義を探る。中世文学における、一連の鳥の問答詩の中でもとりわけ、その相互関連性がこれまで議論されてきた、『梟とナイチンゲール』を取り上げ、相互に比較検討している。従来、本作品の重要な要素とされた、連続的な物語性（connective narrative）、人間的なタッチ（personal touch）、そしてユーモア（humour）以上に、本作品が文学作品として高く評価される点は、結末の取り扱いにあることを指摘する。詩人は、結末において、伝統的なラテン語の問答詩に倣ってではなく、独自の構成と手法を本作品に取りこんでいる。伝統的な問答詩においては、問答の勝利者は、神、キリスト、マリアであり、その主題はすべて宗教的に、キリスト教的に解釈されるといってよい。一方、本作品では、ニコラスという一人の人間がその審判者となり、問答の勝負を決定しないままに終わらせ、解決は読者にまかせている。この相違点こそ、本作品の価値を決定的にする要因と言える。詩人は、ラテン語で書かれた作品に倣って書くのではなく、個人主義を肯定しつつ個人的な自己表現の価値をそれぞれが主張するという固有の手法を見つけたのである。鳥の問答詩の系譜において、なかんずく『梟とナイチンゲール』は、その文学的な意義から言えば、問答詩というジャンルを超えて、時代の大きな思潮を反映する作品であることを論証している。

第二章では、本作品の文体に対するこれまでの印象的な評価への批判を込めて、登場人物の文体的特徴をより具体的に評価するために、それぞれの登場人物の言語表現を統計的な数量化により検証している。本作品の文体の重要性は、後にChaucer や Swift 等によって受け継がれ英語の伝統的な文体の一つになった点である。にもかかわらず、そうした文体の言語的な特徴についての具体的な客観的な検討とその例示となると、これらはこれまで全くなされていない。Owl とNightingaleの対話に焦点をあて、科白における等位接続詞と従属接続詞の種類、頻度数、そして法

助動詞についての統計的数量化による分析を手掛りとして、こうした要素が Owl とNightingale の性格、さらには文体とどのように関連しているのかについて例証している。さらには、筆者が提案した、＜通時的個別文体論＞、つまり作品の個々の登場人物がもつ固有の文体は、英文学史上、いつ頃から現れるようになったのか、Chaucer やGawain-poet の作品に見られる登場人物の文体についても言及しながら個別文体論の発達において本作品がどのような位置づけになるのかについても考察している。

第三章では、『梟とナイチンゲール』の短縮形、省略、語彙について分析し、こうした言語的な特徴が本作品の特異な文体においてとりわけ重要な役割を果たしていることを明らかにする。初期中英語期に属する本作品の言語表現を詳細に調査し、その話し言葉に基づく言語と文体の特徴から、本作品が英語史上特異な位置を占めることに論及している。具体的には、短縮形の使用、代名詞の省略、外来語の使用を極力抑えた、主として英語本来語の語彙選択、そして現代まで用いられている単音節からなる日常語という語彙の特質について検討している。さらには使用されている外来語の多くが繰り返し用いられている事実に着目して、当時こうした外来語は特殊な語彙というよりは、日常においてよく用いられたありふれた語彙であった可能性についても究明している。以上のことから、詩人によって駆使された様々な言語的表現は、丁々発止の問答の雰囲気とその緊迫した空気を見事に伝える役割を果たしており、本作品のこうした特徴を持つ文体が、その後英語の文体の伝統において主要な一つとなる、light, familiar style の嚆矢となったことを具体的に例証しながら主張している。

第四章では、本作品の文体の特徴を考えると、とりわけ大きな意味を持つ、諺、接続詞の反復、首句反復（anaphora）、そして結句反復（epistrophe）といった反復表現について検討し、問答詩としての本作品のきわめて特徴的な文体は基底においてこうした反復の要素によって支えられていることを考察している。諺の役割について、本作品の主要な校訂者である J.E.Wells やEric Gerald Stanley は、梟とナイチンゲールがそれぞれの議論を裏付けるために諺を使用していると述べている。従来、諺の役割についての究明は専らその意味内容のみから行われており、中世文学における口承性との関連や文体論からの視点が欠如していた。中世において文学の担い手であった修辭家たちは、諺を単に議論を裏付けするという狭義な使用に限定させていたのではなく、*The Oxford Dictionary of English Proverbs* (1935; rpt. Oxford: Clarendon Press, 1952)の編者であるJanet E. Heseltineが解説しているように、“mechanism of style”つまり＜文体のからくり＞としても使用している。八音節二行連句（octosyllabic couplet）、1794行からなる本作品において、81行に1回の割合で22回、頻繁に使用される数字から判断しても、本作品における諺の使用は、従来指摘されてきたような諺のもつ一般の通念、およびその説得力により、主旨の強調や倫理の示唆という単一の役割だけに限定されてはいない。問答詩というジャンルにあっては、すべてが「ことば」のやりとりによって依拠している。本作品における諺の多用には、詩人が正用法の問題を越えたところで、「ことば」によって法廷弁論の場面を表現するのにいかに腐心したかが明らかに見てとれるのである。同じ韻律価値をもち、諺の前で規則的に用いられているstock phraseと諺の反復は、聴衆に直截に理解される諺に内在する要素と、簡潔で、流暢な、速度感のある問答の言語に非常によく融合するという要素によって、いやが上にも聴衆に大きな印象を与えたであろう。と同時に、諺の意味する内容とは別に、弁論における説得の技術のうちでも最も効果的・象徴的な諺を殊多用することによって、諺に内在するもう一つの重要な要素である音調の良さが量みかける言葉の激しいやりとりや、そうした問答のみせかけの雰囲気を見事に再現する機能を見事に果たしているのである。諺や接続詞の反復、そして反復に特化した修辭技巧に内在する「韻律」と「形式あるいは機能」が、中世文学の口承性を背景にした本作品の問答詩としてのもう一つの形式と見事に連関して、問答詩特有の文体を形成するのに大いに寄与している。また、本章では、本作品における反復表現は主として意味の強調としての側面が重要視され、その音的効果の側面が過小評価されてきた理由として、＜オーラルなことば＞の機能にたいする現代人の言語感覚、言語意識の喪失に因るものであることを、一連の英語論文で提唱した＜口語文学の力学＞（Dynamics of Aural Literature）理論により論証している。

第五章では、repetitive word pair をとりあげ、本作品の形式、文体と、この修辭技法との関連性を分析する。この技法が、意味の強調として使用されているという従来の理論を、本作品の使用法から反論し、本作品において、その頻度数と分布からきわめて特徴的な修辭技法である、等位接続詞によって語や句が対になっている repetitive word pair という修辭表現が、どのような文体的な役割を果たすのかという点について、Inna Koskenniemi によるこれまで最も包括的な研究成果を批判的に再検討している。Koskenniemi は、古英語、初期中英語のみならず、世界の多くの言語においても、こうした表現が、時間と空間、道徳と情緒といった、抽象的な概念を示し、宗教的翻訳本、法典、行政公文書、叙事詩、説教散文の中でとりわけ多く用いられ、こうした作品の文体を支える特徴的な技巧という点を指摘している。しかし、こうして要素は、この表現に内在する本質によるものではなく、散文ロマンスの『アポロニウス物語』と『ピーター・バラ年記』の2作品以外、彼女の分析の対象となった作品すべてが宗教的なものか、法律公文書類であったというコーパスの偏りに由来する問題点に着目している。つまり、この表現の文体上の役割は、作品のジャンル、主題、とりわけ表現を構成する語彙の特質によって、様々な要素が付与されており、Koskenniemi が

指摘するほど、一律には判断できないことを明らかにしている。本作品におけるこの表現には、抽象的な語彙ではなく、主にアングロ・サクソン語系の馴染みのある語や句が用いられている事実、本作品の問答が法廷訴訟の形式に則っている事実、この技法が伝統的に法的文書において使用される事実、さらにはその音的效果が非常に意識されている諸点に注目し、これらを総合的に考察すると、本作品における当技法の使用は、法廷の雰囲気との再現と問答者の弁舌をより効果的に演出することを意図した可能性がきわめて高いことが論証される。しかも、こうした日常卑近な基本語彙の多用と音調のよさこそが、ペラペラまくしたてる日常の話し言葉の口調という側面を想起させ、多弁さ、冗漫さ、散漫さという、口語性のもつ特性の一面を強く反映したものであり、軽くて、くだけた文体 (light, familiar style) を支える不可欠な要素となっている事実が明らかとなる。

第六章は結びの章として、以上の検証と考察から、本作品が、ミクロのレベルにおいては、口語表現を形成する上で肝要な、日常卑近な語彙、省略、そして様々な反復表現を駆使して、問答の雰囲気を遺憾なく発揮する文体を構築しており、一方、マクロのレベルにおいては、12世紀の文芸思潮運動の三つの要素、写実主義、世俗主義、個人主義、加えて口語性が作品の主題と言語に色濃く反映されており、これまで看過されてきた初期中英語期の言語・文学の成立と発展に新たな視座を提供する英語文学史上この上なく重要かつ注目すべき文学作品であると結論づける。

論文審査の結果の要旨

本博士学位申請論文 *Aspects of Language and Style in The Owl and the Nightingale* 「『梟とナイチンゲール』の言語と文体」は、立教大学教授菊池清明氏が30年来取り組んで来た12世紀末成立の中世英語頌讃問答詩の文体的特長について、従来の見解を改める新説を提出するものである。

序ではヒューマンイズム運動が中世においては12世紀と14世紀に隆盛であったという説に注目しながら、詩人が文学と言語に表現した新しい態度を探り、本神性から人間性への移行を限りなく示している点について主題を分析しながら考察する。問答詩で駆使される修辭法が単に論争の武器としての実用性だけでなく修養の伝統でもあったという長く等閑視されてきた中世における修辭学の側面と本作品の世俗主義と個人主義を肯定する要素が密接に関連していることを論ずる。

第一章では鳥の問答詩の系譜における本作品の意義を探り、鳥の問答詩の中でも相互関連性が議論されてきた『梟とナイチンゲール』を取り上げて比較検討する。伝統的な問答詩においては、問答の勝利者は神、キリスト、マリアであり、主題はすべて宗教的、キリスト教的に解釈される一方、本作品ではニコラスという一人の人間が審判者となり、勝負を決定しないままに終わらせ解決は読者にまかせている。この相違点こそ本作品の価値を決定的にする要因で、詩人はラテン語で書かれた作品に倣って書くのではなく、個人主義を肯定しつつ自己表現の価値をそれぞれが主張するという固有の手法を見つけたのである。

第二章では本作品の文体に対するこれまでの印象的な評価への批判を込めて、登場人物の文体的特徴を具体的に評価するために、言語表現を統計的な数量化により検証、本作品の文体の重要性は後にChaucer や Swift 等によって受け継がれて英語の伝統的な文体の一つになった点にあるとする。

第三章では本詩に現れる短縮形、省略、語彙について分析し、こうした特徴が話し言葉に基づくことを論証した。

第四章では本作品の文体の特徴の中でとりわけ大きな意味を持つ、諺・接統詞の反復、首句・結句反復 (anaphora, epistrophe) といった反復表現について検討、問答詩としての特徴的な文体は基底において反復の要素によって支えられていることを考察した。諺の役割については従来、専らその意味内容のみから行われており、中世文学における口承性との関連や文体論からの視点が欠如していたが、本論文では、諺のもつ一般の通念、その説得力により主旨の強調や倫理の示唆を行う役割だけに限定せず、同じ韻律価値をもち、諺の前で規則的に用いられているstock phraseと諺の反復によって、聴衆に直截に理解され、簡潔で流暢な速度感のある問答の言語を醸成している、つまり、問答のみせかけの雰囲気再現する機能を見事に果たしていると言った。

第五章ではrepetitive word pair をとりあげ、この技法が意味の強調として使用されているという従来の理論を本作品の使用法から反論し、その頻度数と分布からきわめて特徴的な修辭技法である、等位接統詞によって語や句が対になっている repetitive word pair という修辭表現が、本作品においては抽象的な語彙ではなく主にアングロ・サクソン語系の馴染みのある語や句が用いられている事実、本作品の問答が法廷訴訟の形式に則っている事実、この技法が伝統的に法的文書において使用される事実、さらにはその音的效果が非常に意識されている諸点に注目し、法廷の雰囲気との再現と問答者の弁舌をより効果的に演出することを意図した可能性が高いことを論証する。日常卑近な基本語彙の多用と音調のよさこそが多弁さ・冗漫さ・散漫さという口語性のもつ特性の一面を強く反映したものであり、軽く、くだけた文体を支える不可欠な要素となっている事実が明らかとされた。

第六章はまとめて、本作品がミクロのレベルにおいては口語表現形成に肝要な日常卑近な語彙、省略、様々な反復表現を駆使して問答の雰囲気を発揮する文体を構築したこと、マクロのレベルでは12世紀の文芸思潮運動の三要素、写実主義・世俗主義・個人主義と口語性が作品の主題と言語に反映されており、これまで看過されてきた初期中英語期の言語・文学の成立と発展に新視点を供する重要かつ注目すべき文学作品であると結論づける。

このように中世英語の重要作品の文体と価値についての新しい認識を提出する本論文は、博士学位論文として十分の価値を持つものと認める。